

第30回 医療技術者セミナーのご案内

— セミナーの開催にあたって —

これまで医療技術者セミナーは健康セミナーとして市民のみなさま参加の内容で開催して参りました。しかし、なかなか市民のみなさまの参加は伸びず開催に苦慮しておりました。今回、もう一度原点に戻って、本来の医療技術者セミナーとして各団体共通で学び、理解し合えるような企画にいたしました。今回は今年4月に経験いたしました熊本における震災に対して我々他職種それぞれが果たす役割について考えようと企画いたしました。特に熊本震災においては実際に被害が大きかった熊本市市民病院の橋本先生に貴重な体験をお話頂きます。また各団体におきましては災害時におけるそれぞれの医療の役割について発表いただきます。共通な認識をもって活発に意見交換できれば幸いです。是非、多くのご参加をお待ちしております。

福岡県医療団体協議会 会長 中村 泰彦

*** プログラム ***

メインテーマ 『災害時における医療の役割』～熊本災害を中心に～

日 時 平成29年2月18日(土) 13:30～16:30 (受付13:00より)

会 場 ナースプラザ福岡 1階 研修ホール

後 援 福岡県・福岡市・福岡県医師会

1. 挨拶 13:30 福岡県医療団体協議会 会長 中村 泰彦

2. 特別講演 13:40～14:40

演 題 『熊本地震 何が起こり、何を行ったか -command and controlの必要性-』

講 師 橋本 洋一郎 先生 (熊本市市民病院 首席診療部長・神経内科部長)

座 長 福岡県診療放射線技師会 会長 中村 泰彦

3. シンポジウム テーマ 『災害時における医療の役割』 14:50～16:30

【臨床検査技師会】 熊本地震における災害医療支援活動報告

—エコノミークラス症候群フォローアップ検診に参加して— (福光 梓)

【診療放射線技師会】 災害派遣と診療放射線技師の役割 (加藤 豊幸)

【看護協会】 熊本地震における災害支援ナースとしての関わり (清末 定美)

【栄養士会】 高齢者に対する災害時支援 ～福岡県栄養士の熊本支援を通して (渡辺 啓子)

座 長 福岡県看護協会 会長 花岡 夏子

※ 事前申込の必要はありません。参加費 1,000 円を受付でお支払いください。**■■ 特別講演 ■■**

『熊本地震 何が起こり、何を行ったか -command and controlの必要性-』

橋本 洋一郎 先生 (熊本市市民病院 首席診療部長・神経内科部長)

阪神淡路大震災、中越地震、東日本大震災などの大規模災害時には脳卒中を含む循環器疾患(脳心血管病)が増加することが報告されている。発災直後にエコノミークラス症候群(肺塞栓症)で急死することが報告されており、熊本地震でも4月18日に車中泊の51歳女性が急死している。熊本地震において4月19日より開始された深部静脈血栓症(DVT)検診は当院の医師・技師・看護師を中心とした熊本のメンバーが受け皿となって、日本循環器学会が支援の窓口になり、同学会や日本臨床衛生検査技師会などからの多くのボランティア(医師や技師)の方々に行って貰った。日本静脈学会からは技術的支援や弾性ストッキングの手配などをして頂いた。4月21日に県庁で「日本循環器学会専門チーム「エコノミークラス症候群」予防活動に関する打ち合わせ」が開催され熊本地震血栓症予防プロジェクト Kumamoto Earthquakes thrombosis and Embolism Protection (KEEP)Project が始動した。

VTE 対応チームは熊本県庁に必要に応じて18時に集合して、熊本県、熊本市、厚生労働省などの担当者とVTE 予防のための対策を議論した。DVT 検診データの解析や解釈、DVT 検診の意義や役割、弾性ストッキングの適応・禁忌・必要数・獲得手段、組織的配布の方法など、多くの課題を短期間に解決していった。災害時には command and control (指揮と統制) の中での医療支援の必要性を実感した。

『熊本地震における災害医療支援活動報告 ―エコノミークラス症候群フォローアップ検診に参加して―』

福光 梓（地域医療機能推進機構 九州病院 中央検査室）

熊本地震では、エコノミークラス症候群（DVT（深部静脈血栓）による肺塞栓症）による災害関連死が相次いで報道され、これを受けて日本臨床衛生検査技師会は、関連団体と共同の下、被災地支援としてDVT早期発見・予防啓発を主とした検診活動を展開、福岡県臨技にも人的支援要請がなされ、参加の機会をいただいた。これらの活動環境は中越沖地震や東日本大震災の経験をもとに整備され、主な活動内容は、①問診②下肢静脈エコー検査③Dダイマー測定（血液検査）④弾性ストッキングの装着指導であった。震災直後の検診活動には全国からのべ100名以上の臨床検査技師が参集し約2000名の被災者検診を施行、現在は熊本を中心にKEEP project（熊本地震血栓塞栓症予防プロジェクト）が発足し、定期的にフォローアップ検診がなされ、適宜、隣県技師会も参加している。今回はこの活動報告ならびに被災地支援活動から学ぶ大規模災害発生時における臨床検査技師の役割について考えてみたい。

『災害派遣と診療放射線技師の役割』

加藤 豊幸（九州大学病院 医療技術部 放射線部門）

本年4月16日に熊本地方を震央とする、Mj7.3の地震が発生し、熊本市内はもとより、南阿蘇地方も甚大なる被害を受けた。南阿蘇村では多くの病院が被災し、倒壊して病院としての機能を失った中、唯一、阿蘇医療センターのみが機能を保持していたため、阿蘇市、南阿蘇地方の救急患者について一手に引き受けることになった。全国からのDMAT、医療支援班が阿蘇医療センターに集結し、想像を超える救急患者の受け入れにより、診療放射線技師の負担も極めて大きくなり、九州各県より診療放射線技師が派遣された。

また、5年前の3.11東日本大震災の際の福島第1原子力発電所事故後についても、被災住民の被爆状況の測定のために「サーベイヤー」として多くの診療放射線技師が派遣された。

これらについて、診療放射線技師が行った活動の詳細について紹介する。

『熊本地震における災害支援ナースとしての関わり』

清末 定美（日本赤十字九州国際看護大学 救急看護認定看護師教育課程 専任教員）

熊本地震発災後、福岡県看護協会は災害対策本部を設置し、日本看護協会の派遣指示を受け災害支援ナース3回、計36名を派遣した。災害支援ナースの支援活動は熊本県内6か所の避難所であった。災害支援ナースは、自己完結型のため、個人の寝食に伴う物品や看護活動に必要な備品を携行し、現地入りした。

避難所での活動は、それぞれの避難所の規模や支援団体の介入状況の把握から始まり、避難者のニーズをアセスメントし、可能な資源を活用しながらニーズの充足に努め、生活支援を行った。そして深部静脈血栓症や感染症の発生を予測し、避難生活においても避難者が自主的に予防行動ができるような活動をした。避難所での生活が困難な方に対しては、ご家族とも話し合い、福祉への連携を図った。

災害で生じる避難者の生活や健康問題について、日々の看護実践で培った知識とスキルで問題解決へ導く活動を行ったことについて報告する。

『高齢者に対する災害時支援～福岡県栄養士の熊本支援を通して』

渡辺 啓子（公立学校共済組合 九州中央病院 栄養管理科総括主査）

熊本震災においては、日本栄養士会としての支援活動とともに、福岡県栄養士会独自の支援をとおして高齢者に対する食支援の課題について述べる。JDA-DAT（日本栄養士会災害支援チーム）の主たる活動として、①医療救護班の一員として帯同し、避難所巡回等の実施 ②熊本県医療救護班 調整本部での情報収集 ③災害支援車両による避難所への支援物資等の搬送と巡回栄養相談 ④特殊栄養食品ステーションの設置⑤行政等の関係組織や企業との連携した支援体制の構築 ⑥各支援団体（職種）との情報共有と連携日本小児アレルギー学会等）などがあげられる。今回の震災において自由に活動できない高齢者の食に関する問題として、摂食嚥下困難者の「食事」に関する問題があげられる。常食の形態しかなく、咀嚼に問題のある方でも一般食扱いである。災害時には特にわがまもと取られがちな食の問題に対して声を上げて訴えることが出来ずに、何らかの情報をきっかけに見つけ出さないと我慢して食べなければならない環境となっている。食事対応も現在の超高齢社会に応じた支援が求められる。

